

教育の生産性を高めるために

学校長 大 西 誠 一 郎

本校においては、従来の研究に引きつづいて、`教育の生産性を高めるために、`という目標をかかげて、実践的研究を進めることになった。もちろんそれは、本校における従来の研究、たとえば`教授過程を中心とした基礎教育の研究、そしてそれが具体的に展開された`学習指導における困難点の分析と指導、`という研究に、さらに一步を進めようとしたものである。すなわち、教授過程を中心とした研究の成果と、学習指導の上でどのような困難点があるかという分析の上に立って、どのようにすればより効果的な指導ができるかを探究しようとしたのである。一つ一つの教材の学習に、生徒はどのようなつまづきをし、どのような困難点を感じているかを知るならば、それらの知見の上に立って、次の段階は、どのような指導が展開されるならば、より効果的な結果が期待されるかを考えようとしたのである。

ただここで、それらの問題点を考える前に、`教育の生産性、`について一言ふれておきたいと思う。それは、`生産性、`ということばはいろいろな意味に理解される可能性があるからである。それはことばの本質上当然のことであるが、われわれが研究を進める上においても、その意義をいちおう限定しておきたいと思う。

教育学においては、しばしば`生産教育、`または`生産主義教育、`ということばが使われている。ここでは一般に、日本の経済的復興を目的とする新しい教育計画は、明確に生産と関連づけて構成されねばならない(城戸幡太郎)という意味に使われる。`生産技術教育、`もしばしば用いられるが、そこでは生産に必要な技術を身につけるための教育として唱えられている。

次に、心理学においてはやや異なった使い方がなされている。たとえば、`生産的思考、``生産的想像、`など。`生産的思考、`とは、問題事態に直面して、単に過去経験を慣習的、機械的に適用するだけではなく、過去の手段に変更を加えて新しい事態に適應する

ための企てを言い、`生産的想像、`とは、将来の事態に対処するために、試行錯誤をくり返さず以前に、想像の世界において予め効果的な活動を検討する、というような意味に使われている。(Wertheimer, H.)

さて、われわれが使用する、`教育における生産性、`ということばは、前述のものとおのずから異なっている。われわれの使う意味は、`教育の効果、`ということばにおきかえてもよいかも知れない。学習事態について言うならば、一定時間の学習の後、生徒たちがその能力に応じて最大量の進歩をしたことを意味している。生活指導の場合について言うならば、一定時間の訓練の後、生徒たちがより健康な生活態度を修得したことを意味している。

しかし、この場合においても、われわれは、生産性を高めるということは、それだけを切り離して考えているのではない。学習効果は、ただ個々の生徒の学力がつけばよいというだけのものではない。学習効果はおのずからの結果にすぎないのであって、われわれの求めるものは、学習場面がもっとも合理的に運営されているということである。学習の場において、友人や教師に対する人間関係が健康なものでなくてはならず、一人一人の生徒が、情緒的安定を得ているということが必要なのである。学習の結果は、むしろ自然に生まれ出たものであって、われわれは、教育の生産性を高めるために、個人の要求を無視し、情緒的安定を犠牲にしてよいということは、毛頭考えていないのである。

古人のことばに、`有功に賞おのづからきたる、`と
いうのがある。(道元)修行をつめば、その結果はおのづから来るといのである。その結果とは、心というものの本質が知られるとか、あるいは成仏するとか、あるいは悟を開くとかいうような結果がおのづから来るとい意味である。本校における、教育の生産性を高めるということも、その意図するところは同じなのである。修行する、学道するという場合に、はじめから賞を望んでいるのではないのであるが、しかしその功が積めば賞はおのづから来る。そのおのづから来るのを待たずにいる。待たずにいるところへ必ず来るとい

うのが、修行の本当の姿である。待たないからいつまでも修行する。修行していればそこに「賞おのづからきたる」のである。

本校において、教育の生産性を高めるといふのは、以上のように考えたいのである。さて具体的に、一人一人の生徒が、学習場面において展開するものは、いろいろな形に類型化することができるであろう。個々人の学習的要求、情緒的要求が、その効果と結びつく方式には、いくつかの型が考えられる。

- 1) 個人的要求(学習的、情緒的)が満足され、しかも生産性が高まる。
- 2) 個人的要求は満足されるが、生産性が低下する。
- 3) 個人的要求は満足されないが、生産性は高まる。
- 4) 個人的要求も満足されず、生産性も低下する。

われわれがねらっているものは、いうまでもなく1)の類型である。個人的要求が満足されつつ、しかも結果としての学習効果が高まるものである。しかし、その他の型についても、十分考えてみる必要がある。2)の個人的要求は満足されているが、生産性が低下する類のものも、しばしば見られる型である。それはいわゆる放任された教育であり、軌道に乗らない生徒たちである。そして3)には、個人的要求は満足されないが、生産性は高まる型の教育である。学校は少しも楽しくない。ただ高校へ進学し、大学へ進むためにだけ勉強を強いられている型である。強制された外部力のみが生徒をかりたてる。結果としてはある程度の効果をあげているとしても、それはほんとうの身についた知識でも技能でもない。自主性を失った学習であり、受験勉強に追いまわされている生徒の姿である。そして最後には、個人的要求も満足されず、生産性も低い学習の型である。生徒はいやいやながら追い立てられ、しかも結果としてはなんら効果を生まないのである。

以上のように、学習場面、生活場面を類型化して考えてみると、われわれの願いはもちろん第一のものである。われわれは、一人一人の生徒の学習場面、生活場面の構成を考えつつ、結果としての生産性がおのづから高まることを期待したいのである。

二

以上は、きわめて一般的な叙述であった。けれどもその中に、本校が意図している研究のねらいはおのづから明らかになったことと思う。

さて次に、ここでさらに明らかにしておきたいことがある。それは、付属学校としての本校が、具体的に

はどのような教育的理念にもとづいて、教育研究を展開しようとしているか、ということである。

従来、「付属学校」については、いくつかの批判がなされた。その第一は、「付属学校は特権学校だ」という批判である。批判というよりも非難である。すでに義務教育である小学校や中学校の時代から、児童、生徒を選抜して入学させ、優秀なものを集めて教育するということに対する批判である。しかも、児童、生徒の能力によってだけ選抜するというならば問題は別であるが、その上に家庭の条件がはいる、結果的には、上流家庭の優秀児だけを集めて教育を施すということになってしまった。そのはじめは、必ずしもそれがねらいではなかったけれども、特定家庭の異常な教育的関心は、ついに付属学校をして特権学校としての性格を作り上げてしまったのである。

その結果、そこで行なわれる教育は、教育本来のものからかけ離れ、家庭からの直接的な要求に結びついて、上級学校受験のための教育に堕してしまつたのである。一方、地方の学校では劣等児をかかえ、しかも教育に無関心な家庭を相手としながら、教育に専念しているのに、本来研究校であるべき付属学校は、一般の学校の直面している教育的課題に迫まろうとしないということは、付属学校としての致命傷と言わねばならない。付属学校の研究が、いわば現実離れのした、

特殊な状況においてのみ妥当するようなものとなつて、一般への適用も考えられず、付属学校は次第に地方の教育界から遊離した存在となつて来たのである。付属学校無用論が、識者の間に論議されるに至つたのも、けつして偶然ではない。

このような事態は、すでに戦後一時きわめて真剣に取り上げられ、その後しばらくは鳴りをひそめていたけれども、近年再びその問題は真剣に考えられるようになった。そして、終戦後のものは、社会一般の教育に対する考え方もまだ十分統一されたものでなく、民主的教育のあり方についての実践もまだ稀薄な時代であつたから、その批判は、単に巷の声として終わったのである。しかし近年のそれは、現象的には同じようであっても、本質的にはもっと異なつた性格のものである。教育界は、この10余年の間に、民主的教育のあり方について、かなりきびしい試練を経、教育についての考え方も借りものでなく、国民自身のものがようやく打ち立てられようとしている。したがって、付属学校のあり方に対しても、単にお世辞や一時のがれの批判ではなく、根本的な民主的教育の考え方の上に立って、批判がなされつつあるのである。

本校は、幸い、学部と付属学校との協力によってすでに10年余、生徒の構成が一般中学校と同じになる

ように完全抽せんの方法によって生徒選択を行なって来たのである。付属高校についても同様であって、一般高等学校の生徒構成と全く同じ標準学級を作ろうとしている。

もし、本校においても、いわゆる競争試験制を採用するならば、多くの志願者が殺到し、優秀な生徒をとって、いわゆる一流校の列に加わることができるであろう。しかし、その時にいう一流校とは、生徒が優秀で一流だという意味であって、学校が一流だという意味ではない。現在、巷間には、その点についてしばしば混同がなされている。入学した生徒が優秀であるということとは必ずしも関係がない。優秀な生徒を収容した学校ではよい教育が行なわれ、劣等な生徒を収容した学校では劣等な教育が行なわれているというようにことは決してない。もし、劣等な生徒を収容した学校ではすぐれた教育が行なわれないというならば、精薄児をかかえている学校は永久に浮かぶことができない。それどころか、精薄児を教育している学校や施設の中に最もすぐれた教育を行なっているという例は多いのである。そのことはしばらく措くとしても、本校はとくに現代教育が持っている課題と真剣に取り組もうとして標準学級を構成しつつ努力を重ねて来たのである。

以上、一般に付属学校への批判から出発して、本校のとり来た生徒選抜の方法を述べた。もちろんそれは、そのこと自体が本稿の目的ではない。本校の研究が、どのような性格のものであり、またどのような基盤に立って行なわれようとしているかを明らかにしたかったからである。われわれがかかげる「教育の生産性を高める」という目標も、いわゆる特殊な学校におけるそれとは、基本的に性格の異なるものであることをはっきりさせたかったからである。

三

さて、以上のような構想と基盤の上に立って、本校の研究はどのように展開しつつあるかを述べよう。

教育の生産性を高めるというねらいは、二つの領域についてはじめられた。その一つは、教科の学習を中心とした研究であり、その二は、生活指導を中心とした研究である。

教科的学習における問題点はいろいろあるであろうが、本年度はとくに、「学習指導における教師・生徒の相互作用を中心として」という観点をとりあげることにしたのである。

元来、教科の学習は、教師が教材を媒介として、生徒の学習を援助、指導する活動にほかならない。その

場合、教材を媒介として、教師と生徒との出あいがどのようになされるかは、学習が展開される基本であろう。そして必要なことは、教師の指導が生徒に受け入れられ、生徒の要求がまた教師によって受け入れられるということである。もちろん、そのためには、教師は生徒の要求や能力に対して十分な理解をもたなければならない。教師が生徒の要求や能力を十分理解しており、生徒の要求と能力に即して教材が与えられ指導が展開されるならば、教育の効果は、もっとも顕著に現われるであろう。それに反して、教師が生徒の要求を無視し、その能力を正しく理解することができないならば、教師の指導は生徒に受け入れられないだけでなく、拒否され、反ばつされるのである。このようにして教育は、生徒の学力を啓培する作用にほかならないのであるが、もし教師がこの間の関係を理解しないならば、教育は十分効果を期待することができないのである。

近来、学習過程の研究がきわめて活発に行なわれるようになった。それは、教育の場において、教師と生徒とがどのような相互交渉の過程をたどるかを明らかにするものである。本校においても、学習過程を、単に生徒の活動としてだけでなく、教師と生徒との間に展開される相互作用を中心として研究しようとしたのである。その成果は必ずしも十分ではないが、今後の研究への方向づけとして、幾つかのものがはじめられたのである。

第二に、生活指導の問題としては、集団指導を中心として考察したい。しかもそれは、校風を改善するためのホーム・ルーム指導に重点を置いて考えて行きたいのである。

さて、ここで集団指導を取り上げたけれども、集団指導はこれを二つの側面について考えたい。すなわち、集団による個人の指導と、集団それ自体を対象とした指導という二面である。もちろん、この両面は必ずしもはっきり区別できる性格のものではない。それゆえに、一般にはこの両者の区別があいまいであったけれども、ここではできるだけ区別しつつ、しかもその両者を含めて集団指導を考えて行きたい。

集団とは、「2人以上の人間が相互依存的な関係において存在する」とものであると言われる。(Lewin, K.) 人間の集まりが「集団」と名づけられるためには、それを構成する成員の間に、相互依存的な関係が存在することが必要である。もしも、相互依存的な関係が存在しないならば、その時の人間の集まりは、単なる「群集」か「集合」にすぎないのである。しかして、われわれが日常学校で問題にする多くの学級あるいはクラブ等は、その共同生活の経験の上に立って、構成

員が相互に依存的な関係で結ばれているものである。そしてわれわれが意図することは、この集団成員間の結合度をさらに高め、相互の交通を緊密にして、集団生活による個人の高まりをいっそう効果的ならしめようとするのである。

しかし、集団指導はそれだけではない。さきにも記したごとく、集団指導は、集団自体を指導の対象としている。集団は単に個人的能力を加算的に累加してできるものではない。集団には集団自体の性格がある。ちょうど級風や校風が認められるのはそれであって、学級のふん囲気を高め、士気を高揚して、より健康な集団生活を送らせようとするのも、それにほかならない。

以上、二つの側面を考えたけれども、ここで注意したいことは、これらはともに「校風を改善するため」の集団指導であるという点である。従来、集団指導は、たとえば学級指導について見ても、その学級がそれ自体として高まることが第一のねらいとされる。学級の士気があがり、活動的になることが期待される。ところが、その結果ときには学級エゴイズムが生じ、学級対学級の関係は必ずしも良好でないといううらみがあった。それではせつかく角をためて牛を殺すのそしりを免がれないのであって、われわれはもっと総合的に、一つ一つの学級が向上することが、学校全体の校風改善に役立つことの方角において指導がなされる

ことをねらいとしている。そこに、本校の目標を、「校風改善のためのホーム・ルーム指導」とした理由がある。

以上、教科の学習と、生活指導の両面において、目標としている点をおよそ述べることができた。もちろん、そうした教育的実践が、ただちに教育の生産性を高めるといふ結果を招来するとは考えない。しかし、われわれは、そうした期待のもとに実践を進め、研究をつづけて行きたいのである。しかも、さきに述べたごとく、それらの問題は、優秀児を対象にしてではなく、知的能力においては優秀でないものをも含めながら、なおかつ意欲的な学習を展開させるためにどう指導すればよいのかを地道に研究しようとしている。いな時には、知的能力においては優秀でなく、家庭における教育的関心もそれほど強くない生徒を対象とし、しかもその生徒を働かせて、その能力を十分に発揮させ、集団的活動に重要な役割をはたしうるに至らせようとの努力がつづけられるのである。以下に展開されるそれぞれの研究は、そのような意図のもとに生まれたものである。同学の士によって十分批判され検討されることを期待したい。これらの研究は、その批判、検討をうけて、さらに次の研究と実践へとの手がかりとしたいのである。